

2009.02.25

淀川水系流域委員会 中村正久委員長殿

第 103 運営会議審議資料-1 を読んで

小松好人
元枚方市民

第 103 回運営会議で配布された審議資料-1 の「進捗点検の視点と評価基準考え方（案）」を読んで、以下の意見を提出いたします。

1. 河道流下能力の増大

昭和 28 年 13 号台風の実績降雨、同実績降雨 X 1.2、X1.5、X2.0 を検討の対象にすることですが、これらの降雨の雨量確率を考えると機械的とも思われる X 1.2、X1.5、X2.0 は再検討の要があると思います。

昭和 28 年 13 号の実績雨量は計画雨量の 261mm/24h と引き伸ばし率 1.18 から推定すると 221.2mm/24h になります。したがって実績降雨 X 1.2、X1.5、X2.0 の雨量は 265.4mm/24h、331.8mm/24h、442.4mm/24h になります。

私が昭和 27 年～平成 16 年の実績雨量から求めた雨量確率によると、それぞれの雨量確率は 1/50～1/80、1/200、1/1000 以下、1/1000 以下になります。問題にすべき雨量確率の上限はせいぜい 1/300 でその雨量は 275mm/24h、X1.25 程度までだと思います。

2. 洪水被害の算定

「事業の進捗によって流域住民の洪水被害（期待値）はどれほど減少したか」の付録で、現状における氾濫被害期待値の算出法とその結果に触れています。洪水被害（期待値）の計算については、治水経済調査マニュアル（案）に基づくことになると思います。

ここで今まで見送ってきた流量の年超過確率を出来るだけ正確に計算する必要が出てきます。まず区間平均被害額を計算し、超過確率から計算した区間確率を乗じて年平均被害額を計算します。つまり昭和 28 年 13 号の実績降雨などから計算された流量の超過確率が分からないと洪水被害（期待値）が算出できないことを認識すべきです。

淀川の治水基準点枚方における治水安全度 1/200 における基本高水 17000m³/s（瀬田川の洗堰全閉）が妥当か再三疑問を提出していますが、進捗点検では必然的にこれに対する回答が与えられることとなります。出来るだけ早い機会にこの検討結果が公表されることを期待します。

以上